

質問力

話し上手は
ここがちがう

Saito Takasho

齋藤孝

筑摩書房

齋藤孝（さいとう・たかし）

1960年、静岡生まれ。東京大学法学部卒。同大学院教育学研究科博士課程を経て、現在明治大学文学部教授。専攻は、教育学、身体論、コミュニケーション技法。『身体感覚を取り戻す』（NHKブックス）で、2001年、新潮学芸賞を受賞。暗唱、朗唱を提唱する『声に出して読みたい日本語』（草思社・毎日出版文化賞特別賞受賞）がベストセラーとなり、話題を呼ぶ。主な著書に、『子どもたちはなぜキレるのか』『「できる人」はどこがちがうのか』（共にちくま新書）、『読書力』（岩波新書）、『スラムダンクな友情論』（文春文庫）、『三色ボールペンで読む日本語』（角川書店）、『理想の国語教科書』（文藝春秋）、『人間劇場』（新潮社）、『会議革命』（PHP研究所）、『天才の読み方』（大和書房）、『からだを揺さぶる英語入門』（角川書店）などがある。<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~saito/>

質問力 話し上手はここがちがう

2003年3月25日 第1刷発行

2003年7月15日 第8刷発行

著者——齋藤 孝

編集協力——辻由美子

発行者——菊池明郎

発行所——株式会社筑摩書房

東京都台東区蔵前2-5-3 郵便番号111-8755 振替00160-8-4123

印刷——中央精版印刷

製本——中央精版印刷

©Saito Takashi 2003 Printed in Japan

ISBN4-480-81626-7 C0095

乱丁・落丁本の場合は、お手数ですが下記にご送付ください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
ご注文・お問い合わせも下記へお願いします。

〒331-8507 さいたま市北区櫛引町2-604 筑摩書房サービスセンター 電話048-651-0053

質問力

話し上手は
ここがちがう

Saito Takashi

齋藤孝

筑摩書房

装丁・イラスト
郷坪浩子

質問力

——
目次

初対面の人となぜ3分で深い話ができるのか 9

「質問力」で推しはかれるその人の能力 13

「質問力」があればすぐれた人から情報が引き出せる 17

第二章 「質問力」を技化する 21

1 「質問力」を鍛えるトレーニングメニュー 22

三色ボールペンで質問を色分けする 22

「質問力」ゲームでセンスを磨く 25

メタ・デイスカッションの効用 27

鍛えるチャンスは日常会話にあり 29

人間ジュークボックスにならないために 31

2 「質問力」の達人になる 33

おもしろい話をするからと言って、対話上手とは限らない 33

『谷川俊太郎の33の質問』のすばらしさ 36

コピーライターの資質を一瞬で見抜く質問 仲畑貴志 42

第二章 いい質問とは何か？——座標軸を使って

- 1 「具体的かつ本質的」な質問を意識する……………46
- 2 頭を整理させてくれる質問……………50
- 3 現在と過去が絡まり合う質問……………54
- 4 会社の命運を決めたたったひとつの質問……………59

第三章 コミュニケーションの秘訣——① 沿う技……………63

- 1 「うなずき」から「言い換え」へ……………64
 - 「うなずき」と「あいづち」の技……………64
 - 「言い換え」の技と「引っぱってくる」技……………67
- 2 相手に共感して深めていく「沿う技」……………70
 - 相手の言葉を繰り返す「オウム返し」の技「河合隼雄×吉本ばなな」……………70
 - 相手と自分の共通点を探し出す「手塚治虫×北杜夫」……………77
 - 相手が苦労したところに共感する「黒柳徹子×淀川長治」……………80
 - 具体的な話と抽象的な話をつなぐ……………83

相手の話のポイントをたくさん見つける 村上龍×田ロランディ 86

3 ハイレベルな「沿う技」 90

相手の話の中のキーワードを見つける 村上春樹×河合隼雄 90

相手にご機嫌になってもらう「構え作りの技」 谷川俊太郎×高橋源一郎 92

身体的な言語を使って距離を縮める 内田百閒×古今亭志ん生 94

「聞いてみただけ」の質問も時には必要 司馬遼太郎 97

4 相手を勉強したからこそできる「沿う技」 古田敦也×周防正行 99

応用可能な質問——相手の変化について聞く 99

「去年言っていたあの話はどうですか？」 104

5 「本質的かつ専門的」な質問 112

相手の専門性を尊重した質問 蓮實重彦×テオ・アンゲロプロス 112

素朴だが、本質を突いた質問 湯川秀樹 118

第四章 コミュニケーションの秘訣 ② ずらす技 123

1 相手に沿いつつずらす技 124

相手の言葉を整理する 徳川夢声×岡本太郎 124

「具体的に言うとうとういうことなんですか」 日高敏隆×竹内久美子 130

2 ずらずコツは具体と抽象の往復運動 134

いきなり本質を聞く 村上龍×小熊英二 134

3 自分の経験に引きつけて絡ませる 138

「そのうちどこかで引つかかってください」 伊丹十三×岸田秀 138

「私個人の話になりますが」と宣言する 水上勉×山田詠美 142

第五章 クリエイティブな「質問力」 147

1 ダニエル・キイスと宇多田ヒカルの共感 148

最終目標は、相手をインスパイアする質問 148

立場を明らかにして共感を呼ぶ 149

一つでもインスピレーションを得られれば成功 153

二人の共通理解を深めて対等な関係性を維持する 156

「あなたは天才ですか？」 160

2 相手の経験世界に沿うクリエイティブな「質問力」

ジェームズ・リプトン×ステイブン・スピルバーグ 164

相手について勉強したことを仮説にして質問する 164

「カメラは誰の視点で撮るんですか？」 168

3 テーマ性を持つて聞くクリエイティブな「質問力」

アレックス・ヘイリー 174

本音を引き出すパワーを持った質問 マイルス・デイヴィス 174

「あなたの視点からラウンドごとに解説してもらえますか？」

モハメド・アリ 178

「なぜ、あなたは仕事ばかりしているのですか？」

サミー・デイヴィス・ジュニア 185

エピローグ 193

プロローグ

初対面の人となぜ3分で深い話ができるのか

日本で今後間違いない問題になってくるのは、コミュニケーション能力だろう。なぜなら、社会で求められるコミュニケーション力の水準が高くなってきている一方で、その能力が低下傾向にあるからだ。日本語力が低下したと同時に、うなずきなど、体でのコミュニケーション力もまた落ちてきている。

テレビを見ている時は、自分の方から何も発信しなくてもよい。また受け手としてテレビにレスポンス（応答）しなくてもテレビは文句を言わない。その癖がついているので、**人と会話をする際、自分の体全体で相手に応答する習慣がない世代が増えてきたのだ。**

「コミュニケーション不全症候群」という言葉が出てきて久しいが、そういう人々は一層増えている。しかし私が若い人と付き合っただけで感じるのは、友だち同士のコミュニケーション能力はさほど落ちていないということだ。

中学生でも高校生でも大学生でも、友だち同士に限れば、意思を伝え合うことはできる。たとえそれが自分の言いたいことを一方的にしゃべるだけであっても、彼らの間では了解済みであることが多い。

その典型が「ていうか」という言葉である。この言葉で一氣に今までの文脈を断ち切つて、自分の話題に持つていく。同様に相手もそれをやるわけだが、といつてお互い気まづくなつたり、仲が悪くなることはない。

たしかに短時間に双方が言いたい事を言う場合は、この方法は非常に効率がいいに違いない。だから大人が表面だけ見て、若い人たちがお互いの会話に反応しないと決めつけるのは、少々見当はずれである。

しかしそれで問題がないというわけではない。プライベートな関係では、自分勝手な会話や少ない語彙ごいでも許される。だが友だち以外の人間関係には通用しない。

たとえば知らない人と出会い、自分にとって有意義な情報を得ていこうとする場合、そのやり方ではとうてい無理だろう。知らない人と出会う少しパブリックな関係、つまりプライベートとパブリックの中間段階でのコミュニケーションが、実はいちばん大切なのである。

何百人もの人を前にして、しっかりと書き言葉のように話せといわれても、万人ができる

わけではない。しかし初めて会う人と3分後には深い話ができたり、相手の専門的な知識や話題を、たとえば自分は素人でもきちんと聞き出せる能力があるかないかは、その人の人生の豊かさを決定づける鍵になる。出会いが人生の豊かさの質を決めるのである。

初めて出会う人と、どれだけ短い時間で濃密な対話ができるか。実はここに社会で生き抜く力の差が生まれてくる。これからの社会で間違いなく必要とされるのは、「段取り力」と「コミュニケーション力」だ。自ら動き、組み立てていく力を学校教育はおろそかにしてきた。

拙著『「できる人」はどこがちがうのか』（ちくま新書）で私が述べた3つの力は、教えられなくても自分でポイントを盗んで技をマスターする「まねる（盗む）力」と、これと連結する「段取り力」、その上で要約したり質問できる「コメント力」である。この3つが社会で生き抜いて行くために必要な力である。

社会人に聞くと、「確かにその3つがあれば生きていける。自分も学校教育ではあまりその力は鍛えられなかったが、社会に出たとたんに3つの力の必要性を痛感している」と語る人が多かった。

その中の「コメント力」は、まさにコミュニケーション能力そのものであるといつてよい。しかし「コミュニケーション力は大切だ」と言われ続けながら、その低下傾向に歯止

めがかからなかったのは、「コミュニケーション力」という言葉の概念があまりに漠然としており、それを伸ばすための具体的なコンセプトがなかったからである。私はその言葉の概念を本書でクリアにしておきたい。

たしかにカウンセリングでよく用いられる「聞く技法」のようなメソッドはある。たとえばよく言われるアクティブリスニング（傾聴）は、相手に対してうなずきながら、本音を聞きだしていくというやり方で、これを日常生活でも活用しようという動きがある。聞く構えを作るという意味では悪いやり方ではないと思うし、私も試してみたことがあるが、現実の対話シーンにはそぐわないことも多い。

一方が他方をクライアント（患者）とみなし、その痛みを和らげようとするシチュエーションは、日常のコミュニケーションではあまりないからだ。普通のシチュエーションで相手の話にひたすら耳を傾ける人がいたら、不自然な感じがするだろう。

もちろん臨床心理士はそういう技法を身につけており、自然な形で活かすことができるのだろうが、私が考える「コミュニケーション力」はもっと積極的なものである。

それは今回テーマにしている「質問力」に集約される。すなわち**質問するという積極的な行為によってコミュニケーションを自ら深めていく**、という提言を本書でしていきたいのだ。

聞くことが大切なのは事実だが、どれだけ深く聞いていたかはその次に自分が発する質問によってはかられる。聞くだけではなく、質の高い質問をつねに相手に発していく厳しさがなければ、「コミュニケーション力」はなかなか上達しない。スポーツや芸事を何となくやっていても進歩しないのと同じである。

「質問力」のコンセプトを理解し、「コミュニケーション力」を高める練習をしてほしい。

「質問力」で推しはかられるその人の能力

ただ垂れ流して話しているのが普通の会話である。私たちは生まれてこのかた、ずっとそれをやってきている。日常会話はそれですむと思っているが、実は私たちは意外にシビアに相手の実力を、つまりコミュニケーション力を、もつとはつきり言えば相手の「質問力」をはかっている。

たとえば、あまりにつまらない質問ばかりを発する人間とは会いたくないだろう。「この人に会ってもムダだ」と相手から判断されてしまうと、他にすばらしい実力があってもなかなかそれを発揮させてもらえない。つまり、「コミュニケーション力（質問力）」はその他の自分の力を発揮する舞台を用意するために、まず必要とされる力なのだ。

建築家の例をとるとわかりやすい。プレゼンテーション能力やディスカッション能力が

なければ、建築家は家を建てさせてもらえない。「建てればわかる」と主張しても、そんなことでお金を払ってくれるお人好しいないだろう。

相手にお金を出させて、仕事を請け負うためには、対話の中で相手を納得させなければならぬ。ましてや建築のように、建てるまでは現物を見せられないような物を作る場合、「コミュニケーション力（質問力）」の高さが生命線になるのである。

これまで質問に対する答を問うシチュエーションは無数にあった。私たちはつねに学校で答える方の質を問われてきたのだから。だがいちばん大事なことは、問いを作ることだと私は思っている。

たとえば数学で超難解と言われた「フェルマーの定理」が先年証明された。この定理を解いた人は確かにすごいが、一〇〇年以上も人々を楽しませてきたフェルマーはもつとすごいと思う。そういう問いを発せられたということが、非常に高い能力を有している証拠である。

実は受験勉強や他のすべての試験にパスするヒントもここにある。**問題を作る側に立つてしまえば、テストはあつけないほど簡単に解けてしまう。**あるところまで勉強すると出題者の意図が手にとるようにわかってくる。なぜそのようなことを聞くのか、なぜこの選択肢を用意したのかがわかり、「ああ、苦勞して問題を作ったんだね」という気持ちにな

ると、ほぼ間違いない正解を答えることができるのだ。

私は大学受験の国語でその境地に達した時、ほとんど間違えることがなくなった。これは目からウロコの発見だった。それまで私はずっと答える側に身をおいていた。そのため、自分の価値観で答えようとしていた。当然、出題者の価値観と私の価値観がズレれば、私は不正解とみなされる。

今思い返してみても、私は自分の価値観を答に反映させすぎていたように思う。向こうは客観的な評価をしなければいけないので、私一人の価値観や深い読みにかかずらわっていることはできない。出題者はどうも少し浅いところできちんとふるいにかけていたのである。つまり試験制度を考えた時、明らかに私のスタンスが間違っていたのだ。一対一の面接ならいざしらず、試験という場で自分の個人的な読みの深さを評価しろ、というのがどだい無理な注文だったわけである。

話は脱線するが、東大の入試問題は非常にすばらしい。特に二次の国語や社会の論述問題はよく練られたすぐれた問題が出題されている。あまりにすばらしいので、解く意欲がふつふつとわいてくるほどだ。またその問いに答えられなくても納得がいく。つまりあまりに問いが本質的かつ具体的なので、それに答えられないのは明らかにこちらに実力がな

いと証明されてしまう、そういう種類の問いなのだ。